

4本足になったプリン

文はっん



2008年6月28日。

プリンには3本足になった。手術を終え、プリンを迎えにきた診察室のドアの前。僕は腹を括った。プリンが1番つらいんだから迎えに来た僕は絶対につらい顔はしない。ドアを開けた。院長先生の後に続き、壁一面ケージが並び前に案内された。縦3列、横5列の計15個のケージ内は、ほぼ空きがなく犬や猫が入っていた。一番下の列の一番右端にプリンがいた。3本足で立ちあがっているプリンがいた。僕と目が合い興奮しているプリンがいた。嬉しいいのか悲しいのかわからない表情のプリンがいた。「もう家に帰りたい！」そう言っているのだけははつきりわかった。

軟骨肉腫は軟骨成分から発生するが、足の関節の周囲にみられる腫れや歩行異常の症状がでる。早期に足を切断すれば骨肉腫よりは完治することが多い。骨のガン（骨肉腫）にかかる平均は7歳前後と言われるが2歳前後の犬にも発生する。

僕はいつものようにプリンのご飯の

器を下げようとしたときに気付いた。プリンの右の前足首が大きく膨れていた。昨日まではなかった。プリンはその足を庇うように歩いていた。その当時、軟骨肉腫の知識なんてなかった。昨日まで何一つおかしなところはない。それでも一瞬にして頭の中で警報がなった。今でも忘れられないあの瞬間。警報は鳴り止まなかった。プリンが2歳半を過ぎた頃だった。

2005年9月16日。

プリンには5頭兄弟の唯一の女の子として生まれた。生後1カ月くらいからデベソ（臍ヘルニア）で、生後3カ月のときに手術してから飛行機で羽田空港にきた。カウンターに着いたプリンとの初対面はキャリーごしの大あくびだった。緊張感ゼロだと笑っている僕に、入り口を前足でガリガリやっで「だして！だして！」というから心配してキャリーを開けたら、すぐ僕の腕にしがみついてそのまま寝ようとしていた。プリンといっしょに生きるスタートの瞬間だった。ただ、プリン

は甘えん坊というわけではなかった。べったり人間にくっついてくるタイプではなく、人間の顔を伺うというか、あきらかに人間の行動をじっくり観察して気を使っているのがわかる子だった。人間だけじゃなく、他の3頭の子たちにも気を使っているのがわかる子だった。そういう意味でプリンは本当に犬らしくない犬だった。

3本足になったプリンは生きた。病院から戻ったばかりは以前のように動けないことを感じているように暗かった。ただ慣れてくると3本足で上手に何でも出来るようになった。僕とプリン恒例の深夜の散歩も疲れたら休憩したりダッコしたりして以前と同じように続けた。この時期、骨肉腫が肺に転移しやすいことはすでに理解していた。定期的に診断してレントゲンを取り、転移していた場合の抗がん剤の可能性も理解していた。だから僕はプリンといっしょに毎日を大切に生きた。ひとつひとつの行動を楽しむように生きた。ただ、プリンは頭がいいから僕の行動や気持ちをすべて見透かされているような気がしていた。プリンが犬



らしくないことが僕を何度も何度も締めつけた。

2010年1月16日。

プリンには4歳4カ月という短い人生に目を閉じた。プリンは最期に僕を待っていた。部屋に戻るとプリンがベッドでいつも以上に呼吸を荒くしていた、僕はプリンに駆け寄った、プリンが虚ろな目で僕をみつめた、プリンが僕に戻るのを待っていた、プリンが呼吸しているのを待つという精神力のみで、僕が抱き締めた瞬間、プリンが事切れた。プリンが抜けるのが目に見えた。プリンが生と死が目に見えた。僕はプリンの名前を何度も何度も繰り返し呼んだ。4年4カ月という短い人生を何度も繰り返してしまってきた。プリンといっしょに海に行った。プリンといっしょに花見に行った。プリンといっしょにドッグランにいった。プリンといっしょにおやつを食べた。プリンといっしょに昼寝した。プリンといっしょに散歩した。プリンといっしょに大笑いした。プリ

ンといっしょに大泣きした。4年4カ月、僕とプリンは毎日いっしょだった。4年4カ月、毎日いっしょだった。プリンがいなくなった。

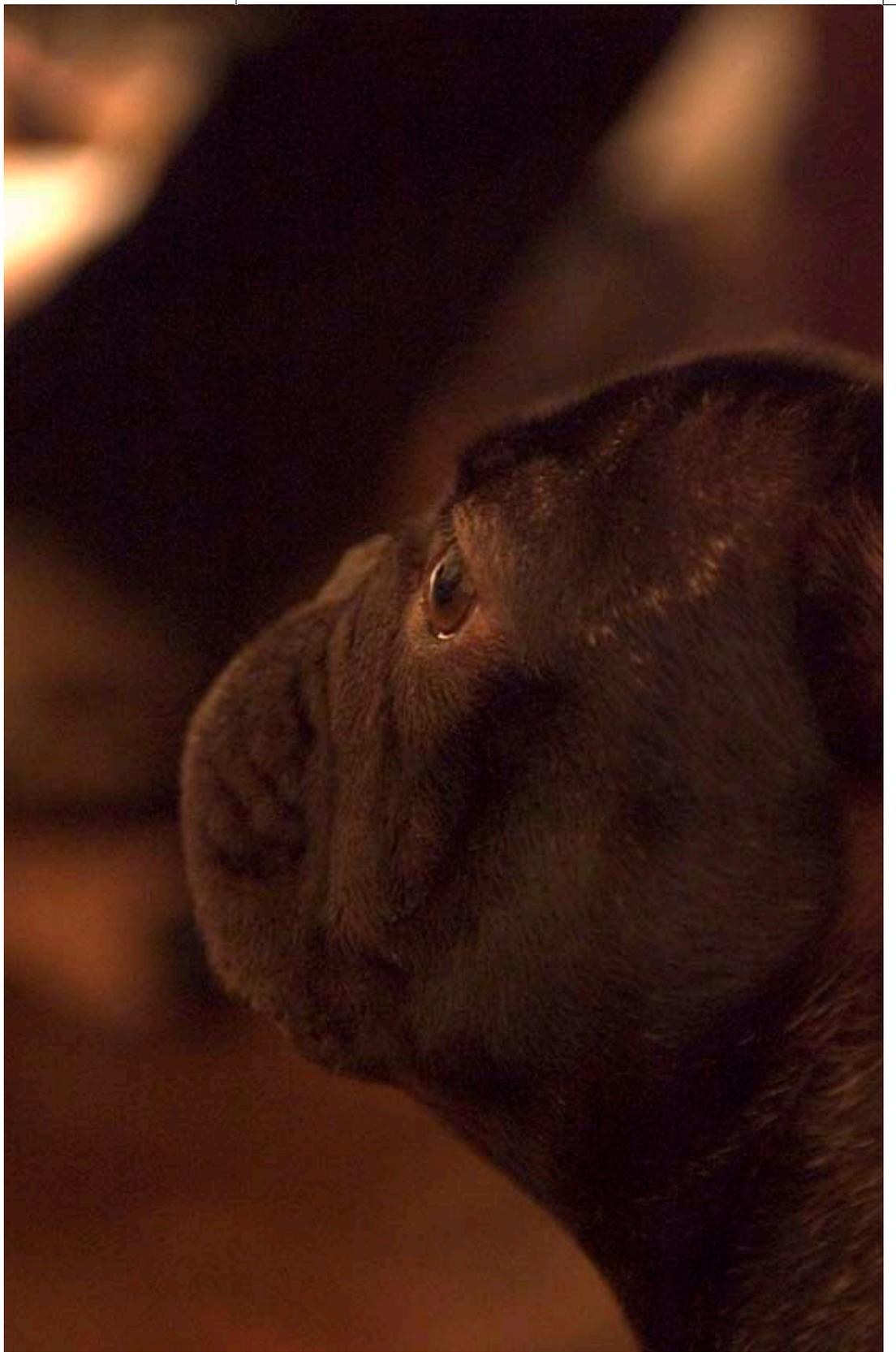
プリンが目を閉じてからどれくらいたっただろう。正直、泣いているうちはよかった。泣いて感情を出しているうちはよかった。感情の方向がはっきりしているうちはよかった。泣きつかれたあとのほうが何倍も苦しかった。感情の方向が上手くコントロールできなかった。呼吸が上手くできなかった。地に足がつかなかった。母が亡くなったあの日、あの瞬間と同じ感覚。気を抜くと自分の軸がどこかに持っていかれてしまいうようなあの感覚。あの時もそうだった。だからあの時もそうした。あの時も僕は自分以外のもう一人の自分を仮想した。彼からの指示をもらわなければ正常を保てなかった。プリンの全身を撫でながら名前を呼び続ける僕に彼は言った。(プリンを綺麗にしてあげよう)僕は爪を丁寧に切った。プリン、いつもなら嫌がって逃げるところに思った。僕はヒゲを丁寧に切った。プリン、いつもなら嫌がって逃げるのにも思った。僕は耳を丁寧に

に掃除した。プリン、いつもなら嫌がって逃げるのにも思った。彼が言った。(プリン、やっと痛みや苦しみから解放されたね)僕はほんの少しだけ穏やかな気持ちになれた気がした。

2010年1月18日。

プリンが火葬場に連れて行かれた。森の中に囲まれた山の中の静かな施設だった。同じ日に亡くなったというシズ子の子がいた。何だかプリンと友達になってくれるような気がした。火葬のあと骨を拾い、合同墓地に埋葬した。合同墓地で手を合わせてプリンとたくさん話をした。風に揺れる木々の動きや音がプリンの返事に思えた。すべての思いを伝えたあと、何度も振り返りながら駐車場に戻った。僕は後ろ髪をひかれながら車のエンジンをかけた、施設の広場の脇道をゆっくり進みはじめ、再び合同墓地を横目にしながら、その瞬間、目の前の情景が歪んだ、目を凝らした、合同墓地の前にプリンの姿が見える、現実にいるわけがないから幻なのだろうが、そこにプリ





Photograph by Kudo Tomoko

ンの姿がみえる、プリンは僕と目が合うとこっちに向かって広場を走っている、プリンが4本の足で勢いよく僕のほうに走ってくる、僕は車を止めた。プリンが僕の目の前にいる。彼は言った。(プリン、4本足になれたね)涙

があふれた。涙があふれてとまらなかった。うれしくてうれしくて涙がとまらなかった。プリンは舌を出してゼエゼエ言いながら幸せそうな顔で僕を見つめた。僕は言った。プリン、生まれてきてくれて本当にありがとう。プ

リン、ウチの子になってくれて本当にありがとう。プリン、これから毎日いっしょだよ。プリン、今日はいっばい遊んでおいで。プリン、明日もまた会おうね。プリン、胸に手を当てれば、いつだってそこにプリンがいるよ。

#### はつん

フレンチブルドッグ専門サイト「ZAIHOO (ザイホー)」代表首までどっぷりフレンチブルドッグに浸かった35歳。現在は5プヒに囲まれながらフレンチライフの高みを目指す。ワイルドというよりはマイルドなタイプ。

#### プリン

はつん家に迎えた2プヒ目のブリンドルの女の子。人間や自分以外のプヒ達の気持ちを察して我慢や遠慮をしてしまう犬らしくない犬。いつだってどこだって平気で愛された子。